「事業」としての修学旅行受け入れ

高嶺　欽一

はじめに

鹿児島県の観光について考える際の，１つの要素として修学旅行をとりあげてみたい。

修学旅行と聞かれれば，多くの人が子どもの頃の懐かしい思い出の１つに挙げるだろう。修学旅行とは，学校の児童・生徒達に知らない土地の文化や自然などを見聞・学習させる目的で実施する旅行で，運動会や文化祭などと並ぶ学校行事の１つに位置づけられている。見聞を広め，日頃は体験できない事物に接することを通じて人間形成に役立てようという目的を持つ。日本独特の学校行事のようである。多くの小・中・高校が最終学年生を対象に実施していて（受験のために中・高校では２年生時に実施するようになっている学校も少なくない），有名観光地に行って名所旧跡を巡るのが従来の修学旅行のパターンだった。

それが変化して，近頃の修学旅行は旅行先での「体験学習」を重視する傾向を強めている。旅行先を海外に求める学校が増えているのは，その具体例の１つで，鹿児島県でも海外に出かける学校が珍しくなくなった。

修学旅行を受け入れる側にも「変化」がみられる。進んで体験学習の「場」を提供しようという機運が芽生えて，受け入れ態勢を整えて積極的に修学旅行の誘致に動き出している。そこでは「イナカ」を学習素材あるいは観光資源と捉えて，「イナカ体験」を表看板に売り込みを図る。鹿児島県の南薩地方ではＮＰＯが活動を始めており，修学旅行で来訪した高校生を民泊させる形態をとって成果をあげつつある。一帯は人口が減少して高齢化の著しい典型的な過疎地だが，定期的・定量的に修学旅行生を受け入れることで「新しい産業の創造」を実現すべく意欲的に活動を展開している。その事例を基にして，修学旅行と観光，さらには新しい「産業」づくりを考えてみたい。

南薩の民泊型修学旅行

南薩――薩摩半島南部地域に高校の修学旅行団体が来たのは2004年のことである。当時は市町村合併前で，生徒達は旧加世田市，枕崎市，笠沙町，大浦町，知覧町，坊津町，金峰町，吹上町の民家に宿泊して，農作物の手入れや収穫をはじめ豚の世話や漁業，郷土料理の調理などの体験をした。宿泊先の家族との濃密な交流も経験した。

このときの好印象も手伝って，2006年には高校４校，中学校２校がこの地域にやって来て，同様の民泊体験をしている。2007年にも少なくとも４校の来訪が決まっているという。

修学旅行を誘致したのは，特定非営利活動法人＝ＮＰＯ＝エコ・リンク・アソシエーション（代表理事：下津公一郎氏）である。下津氏は1995年，42歳のときに生まれ故郷の旧加世田市に戻って，過疎化した地域一帯の活性化策を考えて，その１つとして民泊型修学旅行を受け入れる活動を始めた。その頃，鹿児島県が体験型ツアーのモデル事業を始めており，対象地域に南薩地方の笠沙町，坊津町が選ばれて，鹿児島市などの県内の都市部と農漁村との交流を進めるモニター・ツアーが試みられていた。日帰りだったが，３年の

間体験ツアープログラムを続けた。これが民泊体験型修学旅行受け入れを考えるきっかけになった。2002年には国土交通省の「半島いきいきネットワーク形成促進事業」の実施地域に採択され，観光資源に恵まれた南薩地域のアピールを進めた。

この地域は海幸彦，山幸彦などの神話の伝わる地であり，東大寺に戒壇を建立した中国の高僧・鑑真が日本での第１歩を印したのをはじめ，古く中世以前から大陸との交易地として栄えた歴史を持つ。豊かな海が眼前に広がる鹿児島県内では有数の漁業基地で，かつお節は特産品である。海釣りの盛んな所でもある。2002年にはクジラ十数頭が海岸に打ち上げられて話題を呼んだ。農業部門では，古い歴史を持つミカンの産地であり，早場米が豊かに実ることでも知られる。地域内には太平洋戦争中の特攻隊の出撃基地としてつとに有名な知覧があって，戦後建てられた「平和祈念館」には人影が絶えない。旧加世田市には同じく特攻基地であった万世もある。ほとんど近接して特攻基地を２つも抱える地域は珍しい。ほかにも，リアス式海岸の連なる景観や日本３大砂丘に数えられる吹上浜，等々と変化に富んだ自然に事欠かない。観光資源として生かされていなかっただけである。

1990年代後半の時期に動き始めた下津氏らの民泊型修学旅行受け入れ計画は，３年間の体験型モニター・ツアーや国土交通省の事業を総括した結果，ＮＰＯを発足させて，ターゲットを修学旅行の誘致に絞る方針を打ち出した。先発地である長野県などの視察・研修などが参考になった。これに基づいて関東地区のＪＴＢなどに働きかけて下見をしてもらい，2004年に埼玉県の高校の修学旅行誘致を実現した。

「鹿児島のお父さん，お母さん」

南薩地域に民泊型修学旅行を受け入れる主体になっている組織は，「南薩摩・体験民泊受け入れ事務局」という。下津氏が中心になって運営している。その事務局が，2004年11月にやってきた埼玉県立Ｋ・Ａ高校の生徒と先生を対象に実施したアンケートによって，南薩地域の民泊と農作業などの体験がどのように受け止められたかをみてみよう。

この修学旅行に参加したのは２年生で，数は250人，これに先生19人が，２市６町（いずれも合併前）の90戸に分宿した。１戸に生徒３人が泊まった。先生達も分かれて民家に宿泊した。民宿は，３泊４日の旅程のうち１泊だけで，あとは他地域の旅館，ホテルを利用している。

民泊を受け入れた民家は農業または漁業を主な生業にしている。農作業や漁業の手伝いを体験するのが旅行の目的だから，このような選択になった。数としては農家が大半を占める。

生徒達が体験したのは，農作業ではサツマイモ，カボチャ，ミカンの収穫，野菜，花つくり，畑の草取り，農地の整理，乳牛や豚・鶏の世話，シイタケやイチゴの収穫，等々と多岐にわたり，漁業分門では定置網の水揚げ，魚市場のせり見学などを体験した。貝掘りに連れて行ってもらった向きもある。枕崎では特産のかつお節加工の工程に触れた。女子生徒達は地元の素材を使った郷土料理つくりや農産品加工なども体験した。

生徒へのアンケート調査は，10 項目を挙げて感想を求めている。（先生達への設問もほぼ同様の内容）

1 どんな体験をしたか　　2 もっと体験したかったことは何か
3 民泊体験はどうだったか　　4 食事はどうだったか
5 不自由なことはなかったか　　6 こうして欲しいと思ったことはないか
7 このような体験が，これからの生き方に役に立つと思うか
8 この体験を家族や友人にどのように伝えたか
9 都会と田舎の交流はどのようにしたらいいか
10 民泊体験で感じたことは

生徒達は，鹿児島の農家・漁家で体験した初めての民泊に，ほとんどが「満足」という回答を寄せた。

見ず知らずの他人の家に宿泊すること自体が「不安でいっぱいで，戸惑いがあった」が，一夜を過ごしてみると，受け入れ家庭のアットホームな処遇ですっかり安心し，「やさしく温かいもてなしに感激した」「もっと長く泊まりたい」「大勢の家族と一緒に食べる食事や，おばあちゃんの話に感動した」「お金を貯めてまた来たい」「次は家族で行きたい」といった感想を残している。宿泊先に「いつか恋人を連れて必ず再訪します」と約束した生徒もいたという。

感想文の書き出しに「鹿児島のお父さん，お母さん」と書いてきたのもあった。

先生達が寄せた礼状の中に，「ふだん，職員室には絶対といっていいほど足を踏み入れない生徒が，（南薩摩のパンフレットが学校に届いたことを知って）見せてほしいとやって来て……ちょっと潤んだ目で，あの日のことがよみがえってきますね，といいました。この子にとって，あのミカン畑の１日は，かけがえのない〝永遠の一瞬〟だったのだと思うと，身が震える思いがしました」というくだりがある。民泊とわずかな農作業体験が都会育ちの少年に与えた〝教育力〟を物語るエピソードといえるのではないか。

受け入れ家庭のアンケート回答には「わずか１泊２日の交流だったのに，別れ際に 17 歳の男の子が泣き出したので，こちらが感動した」と記されたのもあった。

いうまでもなく農作業も漁業の手伝いも初めての体験だったが，それだけに驚きの連続で，これにも「満足」という回答が多く寄せられた。感想の中なら拾うと，ニワトリの解体から腸まで使った料理をつくるのに目を見張り，養豚場で「豚の鳴き声がすごかった。匂いもすごかった」と驚いた。作業は「思ったほど大変でなかった。また農業をやってみたい」「すごく体を動かして楽しかった」「タマネギの苗を植えることになり，トラックの荷台に載って畑まで行ったことがとても新鮮だった」と振り返っている。

農家の方は「作業は２時間が限度か」と考えて，生徒達に無理をさせない配慮をしたようだが。

アンケート回答に表れた感想で目立つのは，料理の体験のようだ。女子生徒達は民泊先の主婦らに鹿児島の郷土料理や地元ならではの食材を使った料理を教えてもらった。そのことが「驚きの体験」として強く印象に残り，さまざまな感想文になって民泊受け入れ事務局を喜ばせた。

感想は「農薬を使っていない，おばあちゃんが作った野菜がすごくおいしかった」「さつ

ま揚げを家で作れるなんて思わなかった」「フクレ菓子（注；鹿児島の伝統的な庶民のおやつ）や牛乳プリンなど，おやつを自分たちでつくって，とても楽しかった。料理もたくさん教えてもらった」「初めてトリの生肉を食べた。おばさんの作った煮物，茶椀蒸し，ポテトサラダも全部おいしかった」など。中には「みそ汁が甘くて口に合わなかった」というのも見られる。

靴のかかとを踏んでいたり，女子生徒が「頭の毛の先からつま先まで度肝を抜かれそうな服装」をしていたり，ダブダブでずり落ちそうなズボン姿だったりで，宿泊先のオヤジさん達に眉をひそめさせるケースもあったようだ。しかし，注意を受けると素直に聞き入れて，それが好感を呼び，「ふつうの少年少女だった。ひとは見かけだけで判断できないものだとつくづく思った」という受け入れ側の感想をもたらした。

アンケートを基に考えると，高校生達も受け入れ家庭の方も，南薩での民泊型修学旅行を総じて「よかった」と評価している，といってよさそうだ。実施主体のＮＰＯを主宰する下津氏は，この実績を踏まえて，受け入れ地域を北部の日置地域や東部の頴娃町などにも広げて広域の修学旅行受け入れ連絡会をつくり，250戸～300戸の家庭で20～30校の民泊を受け入れる態勢をつくりたいといっている。

民宿の効用

民泊を体験した高校生達が残した感想で，次のような記述は，このタイプの修学旅行の意義および今後の修学旅行を考えるうえでのヒントになると考えられる。

- 自然を大切にしようと思った
- 田舎に住んでみたいと思うようになった
- お金を持って行っても何の意味もなかった。山あり海ありの雰囲気がとてもよかった
- 都会との差が結構あったが，鹿児島という自然に恵まれた所にも適応できて，大切なものが他にあったんだなあと思った
- 都会の人たちより田舎に住んでいる人の方が心が広くて優しいと感じた
- 私は積極的に人と話をすることができなかったけれど，民泊先の人と仲良くなりたいと思い，頑張った
- 物は売られる前に苦労している人がいると分かった。これからは物を大切にする

コンビニがないことに戸惑った生徒もいたようだが，それがけっしてマイナス評価にはつながっていない。それだけ「イナカの魅力」が大きかったようだ。

受け入れ家庭はかならずしもボランティア活動として修学旅行生を迎え入れたわけではない。所定の宿泊料を各人から受け取る契約でこの事業は進められている。下津さんによれば，１人あたり 7,000 円ほどの収入になるという。民泊先になった農家には，少額とはいえ臨時収入源になる。下津さんがこれによって「農漁村の新しい産業」の創出をと主張する所以である。

それだけではない。孫の世代にあたる高校生が，たとえ一夜とはいえ泊まって会話を交わすことで，農漁村の高齢者が喜び，元気をもらう効果もある。民宿受け入れの効用の１つであろう。

修学旅行は観光客数の１％という現実

このように民泊型修学旅行受け入れには大きな利点があり期待がある。しかし，今後増加する可能性があるとはいえ，修学旅行の鹿児島県への入り込み数はこの10年に限れば漸減ないし横ばいで，実数は７万人を割っている。全観光客入り込み数（800万人弱で推移）の１％以下というのが現実である。

沖縄県は修学旅行の行き先としてもっとも人気がある地域で，鹿児島とは対照的に入り込み数は毎年増加傾向にあり，2006年には43万6,500人に達した（琉球新報による）。最多だった前年2005年より１万人ほど増えた勘定になる。表１で鹿児島県と沖縄県の修学旅行入り込み数を比較して示した。

表１　鹿児島県と沖縄県の修学旅行来訪の推移（概数）

年	鹿児島	（全観光客）	沖縄
1985	22万9,000人	715万2,000人	4万7,000人＊
1988	18万9,000	746万8,000	—
1989	17万7,000	778万4,000	7万5,000
1990	15万0,000	931万5,000	8万5,000
1993	14万4,000	805万4,000	11万0,000
1995	9万7,000	835万4,000	14万4,000
1998	7万9,000	785万0,000	22万1,000
2000	6万8,000	739万6,000	30万4,000
2001	6万8,219	761万5,000	20万6,864
2002	6万1,464	787万3,000	28万5,857
2003	6万5,892	762万8,000	33万5,859
2004	6万7,840	779万4,000	39万3,196
2005	6万5,581	—	42万6,536

＊は1986年の数

鹿児島県教育旅行受入対策協議会および全国修学旅行研究協会の資料から作成

鹿児島県にやってきた修学旅行生は，20年余り前の1985年に229,000人を記録したのをピークに，1988年に20万人を割り，その後も漸減傾向をたどり，1991年に139,000人にまで落ち込んだ。このあと，少しずつながら増加したが，再び減少に転じて1995年には10万人を下回り，1999年には７万人弱に減った。このところは６万人台の後半で推移している。2005年の実数は66,581人である（高校146校30,580人，中学校154校18,635人，小学校260校15,822人，その他34校1,544人）。地域別では鹿児島市地域がもっとも多くて23,243人，次いで指宿地域の16,854人，霧島地域12,413人，種子・屋久地域7,039人，奄美地域7,032人と続く。

このうち種子島への修学旅行入り込みは3,072人で前年の３倍に増えた。ロケット発射基地があって宇宙科学に触れられることや，農業を体験できるグリーンツーリズムが関心をよんでいるようだ。

ちなみに鹿児島県を訪れた全観光客数は，ＮＨＫテレビの大河ドラマ「翔ぶが如く」放

送効果で1990年に931万5,000人だったのが最高で，1992年まで900万人台の観光客が訪れた。その後は漸減傾向で，1998年には800万人を割って785万人にとどまり，以後は700万人台後半の数字で推移している。九州新幹線の一部開通やイモ焼酎人気などの要因が働いて2004年には前年比17万人程度増加したが，これらの要因は〝ブーム〟といえるほどの誘引力はもっていないようだ。（以上は鹿児島県教育旅行受入対策協議会資料による）

一方，沖縄を訪れる修学旅行は好調を維持している。前記のように2006年には43万6,500人を数えた。

全国修学旅行研究協会の調査によると，高校の修学旅行の行き先のトップは沖縄で，全国の42都府県から1,257校27万人が沖縄を旅行先に選んでいる（データは2004年分）。２番目は北海道で，この２道県が抜きん出て多い。以下は京都，大阪，奈良，東京と続き，鹿児島は15番目になっている。九州では福岡が10番目，熊本が13番目，佐賀が14番目という順番で続いている。

沖縄県観光商工部の資料で修学旅行の入り込み状況をたどると，その人気トップの沖縄では年を追って修学旅行客が増え，1992年に10万人に達したあと，毎年２万人から３万人，多い年では５万人強もの急増を記録した。2001年に一時的に減少したが，翌年からまた増加して，2005年には42万6,000人，そして2006年には43万人を超えた。学校数では2,500校を数える。

学校種別では高校がもっとも多くて2005年の実績で1,587校320,860人，中学校では760校99,563人が沖縄を訪れた。地域別では関東が34％，近畿が21％，甲信越・北陸が11％。宿泊地は那覇市が最も多く40％がここに泊まり，次いで恩納村の24％，本部町と名護市が各７％。沖縄本島だけでなく石垣市，宮古島市，あるいは離島の久米島などに行った学校もあるようだ。

「体験学習型」に移行する修学旅行

近年の修学旅行は，旧来の名所旧跡を巡る観光旅行から，日常の学校での学習では体験できにくいことを直接見聞きする「体験学習」型に変わってきており，その「体験」の対象に「平和学習」を掲げる高校が多い。その点で，太平洋戦争で唯一の戦場にされて県民の４人に１人が犠牲者になった沖縄は，戦争の惨禍を学び，平和を考えるのに「最良の場所」であるのは論を待たないだろう。ほかにも原子爆弾の投下で瞬時にして数十万人の命が奪われた広島，長崎が「平和学習」の修学旅行地になっている。それが沖縄に移っていって現在の修学旅行ラッシュになっているという流れがあるようだ。そのことを考えると，「特攻隊出撃基地知覧」のある鹿児島も「平和学習」の場になっておかしくない。沖縄はさらに，青く澄み切った海や独特の文化，サトウキビ刈り体験，マリンスポーツなども修学旅行を惹き付ける要素になっている。

その沖縄も，増える一方の修学旅行客を受け入れる能力が限界に近づいていることなど，課題を抱えている。旅行の時期が他の観光客が多い10月，11月に集中する傾向があり，日程調整が悩みの種になっているという。宿がとりにくく航空機も他の観光客と競合する。やむなく予定を12月にずらして出かける学校も少なくないようだ。また，高校の修学旅行の行き先に海外を選ぶ学校が増えていることや，旅行日程と経費の制限の関係で比較的に

遠距離にある沖縄が不利な立場に置かれるようになりつつある，といった事情もあり，それらから，2008年頃には沖縄修学旅行の伸びが頭打ちになるという見方をする向きもあるようだ。

再び全国修学旅行研究協会の調査を引くと，沖縄を除く46都道府県の高校の修学旅行の行き先で沖縄が1位であるのは東京，神奈川，長野など関東地方を中心にして15都県，2位は関西地方の大阪，京都，香川など5府県，その他でもほとんどで5位までに入っており，沖縄の魅力を物語る。九州は距離が近いせいか大分（4位），宮崎（5位）の他は行き先のベスト5に入っていない。鹿児島は1位が東京で，続いて京都，大阪，奈良，長野の順になっている。沖縄の高校の旅行先も鹿児島とほぼ同じ傾向のようである。

民泊型国際交流の「からいも交流」

修学旅行の入り込み数に関しては，鹿児島と沖縄では大きな開きがあって，現時点は両者を比較して云々する段階ではない。民泊型の体験学習が好評だといっても，それは始まったばかりで，誘致努力や受け入れ態勢の整備などこれからの課題は山積している状況である。

しかし，民泊型の体験学習修学旅行が鹿児島県の南薩の地で種が撒かれてしっかり芽を出した事実は，けっして小さいことではない。体験学習型受け入れは2006年に種子島でも始まった。西之表市のＮＰＯ法人「ジュントス」は同年10月，広島市の私立中学校の生徒230人を迎えた。サツマイモ掘りやシーカヤック体験，さつま揚げ作りなどのプログラムを用意して喜ばれた。霧島市でも霧島山麓の霧島，牧園地域と隣接する湧水町の3地域で2005年に「霧島高原自然体験ツーリズム協議会」をスタートさせて，同じく広島市の中学生をよんでいる。南薩の指宿市でも頴娃町，知覧町とともに2006年夏に「指宿大好き体験協議会」を発足させた。枕崎市ではかつお節製造を修学旅行生に体験させる試みを続けている。

日置市でもグリーンツーリズムを受け入れる態勢づくりが進められ，2006年も押し詰まった12月に推進会議が開かれて，農業体験を中心にしたツアーを推進することを申し合わせた。11月には東京の高校生120人が地域の農家に宿泊体験をしている。（南日本新聞ほかによる）

このように，民泊型修学旅行を受け入れようという機運は各地にあって，積極的に取り組む意欲を見せている人々は鹿児島県各地に少なくないようである。

民泊型農業体験ツアーには先進事例がある。1982年に大隅地域で始まって既に25年の活動実績をもつ「からいも交流」がそれである。「からいも」はサツマイモの鹿児島名である。主として留学生を対象にした活動で，東京など大都市に勉学の目的で来ている外国人に毎年春の時期に鹿児島のイナカに来てもらって，農家に分宿して2週間ほど農業を体験し，その間地域の人々や子どもたちと普段着の交流を深める。活動の趣旨に賛同して受け入れ家庭になる農家は大隅から北薩地域，さらには宮崎県にも広がって，広域の交流ネットワークができあがっている。宿泊体験をした留学生と宿を提供した農家の家族とは，その後も交流が続き，農家を再訪したり，鹿児島側が帰国した留学生の国を訪問したり，といったプライベートな関係を続けている家族も珍しくない。

また，鹿児島の高校生達をアジアの留学生の出身地に派遣する活動も行ってきた。こちらはカライモとアジアをくっつけて「カラモジア交流」と称した。韓国との交流をする「コグマ交流」もある。

途中，運営につまずきが生じて組織の存続が危ぶまれた時期があったが，活動の趣旨が広く理解されていたことで組織は立ち直って再発足し，現在も鹿児島に根を下ろした草の根の国際交流体として地道に活動を続けている。

民泊型修学旅行を受け入れる活動を根付かせるためには，このような先例に学び，また失敗例を冷静に検証して，受け入れ態勢を整えることが必須条件になろう。

「自分発見」の旅

前記のように，鹿児島県各地で民泊型・体験学習修学旅行を受け入れようという地域がいくつか出てきた。それぞれに活動を先導するリーダーがいて，ＮＰＯ法人などの組織をつくって活動体に仕立てている。

リーダーの役割は大きい。修学旅行生の民泊先を確保し，農作業などの体験学習のプログラムを作成し，遠隔地の学校に旅行誘致を働きかけ，誘致が実現したら生徒達を出迎え，必要な資金集めに奔走し……と，一人何役もこなす必要がある。南薩摩の事例を引くと，下津公一郎氏がリーダー役をひとりで担って修学旅行誘致にこぎつけた。もちろん，協力者を少しずつつくっていったが，ＮＰＯの実務の大半は下津氏ひとりで運営しているようである。

下津氏は，民泊型修学旅行の将来性を見越して活動を始めた。長野県や新潟県などに先進例があったことは事実で，そこで見聞したことを南薩地域で始めるきっかけにしたのだが，体験型修学旅行はたしかにこれから増加していく可能性をもっていると考えられる。

全国修学旅行研究協会の行ったアンケート調査（対象は全国の中学校；2005 年）では，80％が「体験学習を取り入れた」と回答している。「今後取り入れたい」は 11％で，つまり９割を超える学校が体験型学習の採用に積極的な考えを持っていることになる。その背景には文部科学省の方針があって，それに対応していると考えられる。（文科省は 2002 年度に「総合学習」の一環として「豊かな体験活動推進事業」を，2003 年度には体験学習推進校を指定し，2004 年度には「長期にわたる共同生活体験活動推進事業」を提示した）

南薩地域で民泊を体験した関東からの修学旅行生が残した感想文は，農漁家に宿泊して味わった体験が彼らに与えた「感動」を雄弁に語っている。

- お金を持って行っても何の意味もなかった。たくさんの人と出会えたこと自体が自慢です
- 世界が広がった気がする。自分も知らない人を受け入れられるような心を持ちたい
- 私は積極的に人と話をすることができなかったけど，民泊先の人と仲良くなりたいと思い，頑張った
- 外の空気や星や景色がとてもきれいで，自然を大切にしようと思った

彼ら彼女らは，自然を「発見」し，それを大事なものと感じた。

見ず知らずの民泊先の家族と接して，その温かさに触れたことで，自分を「発見」した。

これこそが，体験型修学旅行の最大の成果であり，修学旅行という「教育」活動の目指

すことであろう。体験型修学旅行はこのような意義をもっている。大いに推進していくべき教育活動なのだといってよさそうだ。

課題は多い

これを軌道に乗せ，鹿児島を民泊体験修学旅行の目的地に育てていくには，いくつもの課題がある。

１つは，リーダーの確保であり養成である。態勢づくりの成否はこれにかかっているといっても過言ではない。

２つ目は，協力者の確保であり養成である。下津氏は南薩地域で少なくとも 100 戸の民泊受け入れ家庭が欲しいといっている。それには受け入れをスムースに運ぶための条件整備やプログラムの整備が不可欠になろう。

３つ目は，民泊体験型修学旅行受け入れ地域を有機的に結ぶネットワークづくりである。各地域がバラバラに修学旅行を受け入れるよりは，互いに連絡を取り合って，情報交換やアイデアの相互提供を行う方がいいのは明らかだろう。協力して修学旅行を誘致したり，日程や受け入れ先の調整をする，といった事態にも効率的に対応できる。

ほかにも，民泊体験の効果を高める上で改善が求められる課題は少なくない。

まず，修学旅行の誘致という問題がある。前述したように鹿児島を目的地に選ぶ学校数は漸減ないし横ばいで推移している。これを増加に持っていくのは容易ではない。鹿児島県観光連盟は県外からの観光客の誘致とともに修学旅行の誘致にも積極的に取り組んでいる。鹿児島県単独ではなく，隣に位置する熊本県，宮崎県と一緒になって「南九州体験学習トライアングル」と称して合同の誘致活動を進めつつある。具体的な体験プログラムをルートにして示して，南九州の「魅力」で誘いをかけている。修学旅行は有力な観光客であり，鹿児島の魅力を知ってもらうことで先々のリピーターになってくれる期待もあるからだ。それでも修学旅行の入り込み数は横ばいを続けている。

このような「官」の施策と民間の組織であるＮＰＯなどの活動をうまくリンクさせることも，今後の課題になってこよう。2010 年に予定されている九州新幹線の全線開通は，修学旅行を含めた観光客の誘致に大きなプラス要因になることはまず間違いない。それまでには官民協力態勢を具体化しておく必要があるだろう。

修学旅行は教育の面だけでなく，将来の鹿児島観光客を育成するかっこうの機会という意味合いも持つ。少年少女時代の若い胸に好印象を植え込んで，将来のリピーターに育てる。そのような視点が大事だ。

沖縄を訪れる修学旅行は，３泊４日あるいは２泊３日の日程が大半という。３ー４日沖縄に滞在するのである。私立高校の場合は５泊６日の例もあるようだ。対して，南薩の事例では１泊２日で，あわただしさを免れない。実際にアンケートでは「もう少し長くいたかった」という声が出ている。これは旅行のプログラム自体の問題であり，受け入れ側だけでは解決しにくい課題だが，民泊の効果を考えると，何らかの対応が求められよう。

現金収入と「生きがい」をもらう

最後に，修学旅行と過疎地域振興との関連を考えてみたい。

前記の下津氏は，過疎化の著しい南薩地域の振興に修学旅行の誘致が有効ではないかと考えて，それを実現する主体としてＮＰＯをつくった。ここにやって来た修学旅行生は，民泊先に 7,000 円を払うことになっている。１家庭に３人ずつ宿泊するから，21,000 円が入ってくる仕組みだ。これが２泊になれば収入は２倍になる。もちろん食事代や農作業体験などに伴って支出も生ずるから，全額が収入になるわけではないが，農家にとっては無視はできない臨時収入になる。仮に 100 軒の家庭が 300 人の生徒を受け入れたとすれば，地域全体ではかなりの額の宿泊費が入ることになる。このような状況を想定して，下津氏は修学旅行受け入れ活動が「新しい産業」になりうると考える。

南薩地域に限らないが，いわゆる過疎地では人口が激減して往時の活気が失われ，個々の集落あるいは地域自体が崩壊あるいは消滅の危機に直面している。南薩地域の旧笠沙町は 1950 年頃には 14,000 人を超える人口があったが，日本が高度経済成長に入った頃から，若い人を中心にして大量に人が出て行き，人口は 2005 年には 3,900 人台にまで減少した。これはピーク時の３分の１以下である。隣の旧大浦町も同様だ。地域の中心である旧加世田市でも半減している。逆に高齢化は人口減少に反比例して他に先んじて進行する。旧笠沙，旧大浦両町では，65 歳以上が全人口に占める割合である高齢化率が 40％台の後半という実情にある。このような現状は鹿児島県の大半を占める過疎地域に共通する。

過疎地域対策は 1970 年から政府の施策として進められてきた。しかし，目立った効果は上げられず，過疎地域の衰退は止むところを知らない。小泉内閣の進めた「構造改革」は地域間格差を拡大させた。過疎地域はいっそう衰退の度を進めつつある。ここに残った高齢者達は，農業の衰微とも相まって元気を失っている。

そのような現実に，修学旅行生の来訪はどのような効果を発揮するのだろうか。それは，修学旅行誘致が軌道に乗って若い生徒達が定期的のやってくるようになって，それに見合う宿泊費が懐に入るようになってみなければ，即断はできない。しかし，１回の受け入れ体験で，農家の高齢者達が「高校生に元気をもらった」「礼儀正しい子どもたちだった」などと言って喜び，またの来訪を楽しみにする姿を見せている。この現金収入以外の効果も，貴重なものといっていいのではないか。修学旅行生の民泊は，受け入れ家庭に臨時収入をもたらすとともに，高齢になった人たちに「生きがい」を感じさせる，という二重の効果を，どうやらもっているようだ。この活動で過疎問題がすべて解消するわけではないが。

民泊型・体験学習型修学旅行の受け入れは，けっしてささいな事業ではないと考えてよさそうだ。１つには観光振興の要素として，１つには高校生や中学生への大事な「自分発見」の場を与える教育の一環として，さらには過疎地域に新しい「刺激」を与え，一定の収入をもたらし，年をとった人々に「元気」を呼び覚ます効果を期待できる。今は小さな芽生えの段階にとどまっているが，これを大事に育てて「新しい産業」にしていく視点を持ちたいものである。

おわりに

民泊型修学旅行を受け入れる試みを南薩でやっていることは，新聞の記事で知った。修学旅行といえば，寝しなに枕投げをして騒いで叱られた思い出があるくらいだが，旅行の受け入れを始めたＮＰＯ主宰者の話を聞き，資料を集めて目を通したりしているうちに，修学旅行のもつ大きな「効用」に気がついた。なかでも，民泊を体験した関東地域の高校生がアンケートに答えて書いた感想が強い印象を与えた。有名観光地を巡る物見遊山的な修学旅行ではたぶん得られないであろう貴重な体験を，この高校生達はしたのだった。その大きなものの１つが「自分発見」なのだ。

たった１泊の民泊である。しかし，見ず知らずの鹿児島の農家に泊まって，その家族と濃密に接し，人の温かさを感じ，「自分も人を受け入れられるような心を持ちたい」と思うようになったのだ。お金では買えないものがあることに気づいた生徒もいた。立派な教育効果というべきであろう。

加えて，主宰者は民泊型修学旅行を過疎地域の振興の一助にしようと目論んでいる。容易なことではないが，可能性を秘めた発想である。これが成功するとしたら，今は実質的に見捨てられている過疎地に若い息吹が吹き込まれ，現金収入がもたらされることになる。情熱に燃える１個人の頑張りだけでなく，組織的な課題として重点的に取り組む価値のあるテーマであると考えられる。この先も注目していきたい。